見　本

国際関係学部　グローバル人材育成　（小論文）

R5 G 論 I

008

受験番号			－					氏名	

評点	

以下の文章を読み、問い（1）（2）に答えなさい。

シリアで内戦が始まって10年目を迎えた。国連が「今世紀最悪の人道危機」とまで呼びながら、国際社会をもってしても止められなかったシリア内戦。それは人類史上の悲劇として歴史に刻まれるだろう。

シリア情勢はここ数年で刻々と変化した。政府、反体制、IS、クルド人組織など大小数百を数えるグループが現れ、衝突した。シリアの国土は荒廃し、もはや計測不能とされるほどの死者と難民を生んだ。内戦前の人口約2240万のうち、シリア人権監視団によると、58万人以上が死亡ないしは行方不明となっている。また国連によると、560万人以上が国外で難民となり、国内にはさらに610万人の避難民が存在する。人口の半数以上が家を失っているのだ。

こうした状況下、シリア国内では現在も、様々な集団がそれぞれの思惑のもとに介入を続けている。そんななか、ロシアやイランの軍事援助を受けたアサド政権は、内戦前よりも強力な圧制を敷き続けている。

今後、この国がどのような歴史を歩むのか、誰も予測できない。しかし、あれだけ多くの犠牲者を伴い、国土に血を流しながら、民主化は実現されず政権も倒れなかった。その絶望的状況を、我々はどう捉えればよいのだろう。数さえ把握できないほど多くのシリアの人々が、今日も不安定な状況で異郷に暮らしている。人々が心から安堵し、故郷に帰る日が来るまで、本当の意味でのこの内戦が終結したとはいえない。

この内戦の本質を捉えることは実に難しい。立場や組織によって見方は変わり、日本においても専門家の間で考えが異なっている。

しかし私はあえて一言だけここに記しておきたい。シリアの人々は国際的に“シリア内戦”と称されるこの動乱に「内戦」という言葉を使わない。彼らは「革命」という言葉を使うのだ。たとえ現状が混沌そのものであっても、この一連の出来事が確かに“自由”という人間の当然の権利のもとに戦われたこと、そして破滅に向かうためではなく、いつか実現されるだろう、より良い未来のために起こった出来事だったと信じている。シリア人にとってこの動乱は、民主化という理想のもと、多くの犠牲を伴いながら進められようとした歴史的な運動だったのだ。

内戦前のシリアには、経済的側面からでなく、暮らしや文化をもって人間としての豊かさを享受できる日常があった。相互扶助の非常に強いコミュニティに生きていたため、貯蓄や安定した仕事がなくても、助け合って暮らすことができた。食料も豊富で安価だったため、貧しい家庭でも飢えに直面することはほとんどなく、人々は労働や経済性や利便性ではなく、もっと人間の暮らしとして根本的なもの---家族や友人を愛し、愛されること---そうしたことに人生の大部分を費やしていた。

小松由佳『人間の土地へ』（集英社インターナショナル、2020年）

問い（1）　上記の文章の要旨を200字以内でまとめなさい。